

第五十二回中央教化研究会議 基調報告

死の宗教 生の宗教

三原正資

法華経は誰のために説かれたのか

宗祖降誕八〇〇年を迎えるに当たり、全国からお集まりの皆様と共に、日蓮聖人について学び合うことができ、大変ありがたいことと存じます。

さて、文永一年（一二七四）五月一七日、

けかち（飢渴）申すばかりなし。米一合もうらず。がし（餓死）しぬべし。（『富木殿御書』定遺八〇九頁）

という、元の侵略のさなか日本がまことに悲惨極まりない状況の中を、聖人は佐渡から鎌倉へ帰り、そして身延山に入られました。そして、これまでの生涯を総括するように、ただちに『法華取要抄』を著わされました。力強い筆跡に聖人の意気込みがあらわれています。その中には、次のような一節があります。

問て曰く、法華経は誰人の為にこれを説くや。答て曰く、(略)末法を以て正と為す。末法の中には日蓮を以て正と為すなり。問て曰く、その証拠如何。答て曰く、況滅度後の文これなり。疑て云く、日蓮を正と為す正文如何。答て云く、有諸無智人悪口罵詈等及加刀杖者等云云。問て云く、自讃は如何。答て云く、喜び身に余るが故に堪え難くして自讃するなり。(定遺八一三頁)

さて、このご文章から想像の翼を広げてみたいと思います。日蓮聖人が法華経と出会われたのは、いつ頃のことでしょうか。おそらく、若い頃のことでしょう。そして、その宗教的出会いの本質を示すことばが、

法華経は誰人の為にこれを説くや。(略)日蓮を以て正と為す。

の一句ではないでしょうか。すなわち、聖人は法華経は私・日蓮のために説かれたという予感を若い頃にもたれたのではないかと推察するのです。そして、その予感を、私・日蓮は生涯を賭して実現したと振りかえられたのが、

日蓮は広略を捨てて肝要を好む。いわゆる上行菩薩所伝の妙法蓮華経の五字なり。(定遺八一六頁)

と示されているように『法華取要抄』ではないでしょうか。いわば聖人は上行菩薩の物語を法華経の本質的なメッセージとしてとらえ、自己の行ないによって実現されたのです。

「法華経の行者」の意味

このことを、聖人が佐渡へ流罪となるとき、土牢に入れられている日期に送った『土籠御書』に、次のように示されています。

法華経を余人のよみ候は、口ばかりことは（言）ばかりはよめども心はよまず。心はよめども身によまず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。（定遺五〇九頁）

「身に読む」べき法華経として聖人が特に示されたのは、法師品・勸持品・常不輕菩薩品等でした。そのために、佐渡島をのぞむ寺泊において書かれた『寺泊御書』では、

また本より存知の上なれば、始て歎くべきにあらずと、これを止む。（定遺五二三頁）

と苦難への覚悟を述べているのです。

この法華経を「身に読む」ことは「法華経の行者」であるということですが、このことの重大な意義については、『報恩抄』の一節を忘れるわけにはいきません。

今日本国には法華経の行者は一人もなきぞかし。（略）教主釈尊は（略）両部の大日如来を朗徒等と定めたる多宝仏の上座に教主釈尊居せさせ給ふ。此れ即法華経の行者なり。（定遺二二八〜九頁）

とあります。

ところで、この仏陀とは法華經を實踐する者という趣旨は、『スッタニパータ』（六五〇）の

生まれによってバラモンなのではない。（略）行為によってバラモンなのである。

という一節と重なり、大切なものと考えます。ともあれ聖人は『寺泊御書』に

勸持品に云く、諸の無智の人有りて悪口罵詈す等云云。日蓮この經文に当れり。汝等何ぞこの經文に入らざる。

及び刀杖を加える者等と云云。日蓮はこの經文を読み。汝等何ぞこの經文を読まざる。（略）数数擯出せられん。数々とは度々なり。日蓮擯出衆度。流罪は二度なり。（定遺五一四〜五頁）

と述べられているように、法華經とひとつとなる悦びにふるえながら、竜の口から寺泊へ、そして佐渡へ向かうのです。

靈地佐渡を巡る

五月二三日、二三日、二四日と晴天に恵まれた三日間、私（現代宗教研究所長三原正資）と森下恵王所員、そして池浦英晃研究員（新潟県法顕寺修徒）・小瀬修達研究員（新潟県妙法寺住職）は寺泊から佐渡へと、宗祖の靈蹟を巡りました。

私たちは巡拝にさきだつて、本山村田妙法寺へ参りました。それというのは、五月一四日、同寺小林教一貫首が現

代宗教研究所に來られ、「日蓮さまの道」について案内を承ったためです。五月二日、妙法寺へ参りますと、近隣寺院のご住職、遠藤要顕師（信盛寺住職）、小林正行師（大慶寺住職）、宮田基文師（大栄寺住職）、小黒英純師（妙音教会担任）、そして小林博氏（妙法寺総代）が集まっておられ、「日蓮さまの道」の説明をうけ、それから関係の寺を巡りました。宗祖が寺泊から佐渡へ向かうまでの風景を想像し、各寺を回り、『寺泊御書』を認められたと伝えられる寺泊祖師堂、法福寺（海津武尚住職）、そして、角田浜かくだはまの妙光寺（小川良恵住職）へ行きました。本間守拙師の『日蓮の佐渡越後―遺跡巡りの旅―』（新潟日報事業社 一九八八、以下『日蓮の佐渡越後』）には次のように記されています。

日蓮聖人は寺泊で六日間順風待ちのすえ佐渡へ向けて発船したが渡れず角田かくたの磯に漂着し、一夜を付近の民家で明かされたという。そしてその翌日ここから佐渡松ヶ崎へ渡られている。

さて、私たちの佐渡の巡拝を聖人の旅路に沿って述べましょう。

松ヶ崎は佐渡の玄関口、北陸道の国津（こくつ）として使われ、中世にも引きつがれていたので、日蓮聖人もこの海路で松ヶ崎の鴻うづノ瀬せ浜に着かれたものと思われる。（『日蓮の佐渡越後』）

松ヶ崎の本行寺を訪ね、武藤孝臣住職から、お寺のいわれや寺宝の説明を受けました。本堂の中に、本間師のこの本が重ねて置かれ、それをもとめて御朱印を押してもらいました。

私は立正大学のサークル「御遺文研究会（探遺会）」に所属していました。五〇年前のことです。高木豊先生の紹

介で、佐渡の霊跡を巡ったとき、世尊寺を訪ね、本間師にお会いしました。著名な書家である本間師が半折に書を書いておられた姿が目には焼きついています。今回、師の本から引用させていただくのも、そのときのご縁でしょう。

本行寺の近くには、聖人が佐渡上陸第一夜を過ごされたと伝えられ、「おけやき」と尊称されるけやきの大樹がありました。私たちは「おけやき」を拝し、ついで「法華岩」をたずね、小佐渡山脈をこえるためにレンタカーに乗って、小倉峠を越えました。この辺りを聖人も通り、配所へ向かわれたのです。晴れわたった空の向うに、越後の山を見ることができません。『日蓮の佐渡越後』には次のように述べられています。

聖人はそうした鳥のたたずまいを眼に映しながらこの山越え道を中佐為にたどり着いて、しばしの休息をとられたという。聖人が杖にして相模の依智から携えてきた「星降りの梅」の杖を差し置いたのが根づいて今に伝わり、毎年年を咲かせている。（『日蓮の佐渡越後』）

これが御梅堂です。この御堂を下ると国中平野が広がり、その中に、根本寺（竹中智英貫首）があります。

塚原の三昧堂に聖人が入られたのは文永八年（一二七二）十一月一日、聖人はここで『開目抄』を執筆されました。同抄にはこの間の事情を次のように述べられています。

日蓮といぬし者は去年九月一二日子丑の時に頸はねられぬ。此は魂魄佐土の国にいたりて、返年の二月雪中にして、有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みんないかにをぢずらむ。此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国当世をうつし給ふ明鏡なり。かたみともみるべし。（定遺五九〇頁）

今なお聖人の心が伝わってくる文章です。

『開目抄』は、同抄に

誰をか当世の法華經の行者として仏語を実語とせん。（定遺五九九頁）

とあるように、ご自身が「法華經の行者」であるかどうかをテーマとした著述です。すでに紹介したように「法華經の行者」とは釈尊をも包含した高次の内容をもっています。そして聖人は、ご自身を「仏語を実語と」する「法華經の行者」＝上行菩薩の自覚を示されたのです。このことを『種種御振舞御書』には、

日蓮が不思議とどめんと思ひて勘へたり。（定遺九七五頁）

とも述べられています。

さて、このあと、同九年四月には配所を一谷に移されます。現在の妙照寺（加門義龍貫首）です。

御草庵の跡は本堂西手の小高い丘の中腹で、いまは祖師堂が建ち昔を語り伝えている。文永一〇年（一二七三）四月二五日、聖人はここで『観心本尊抄』を著し、続いて七月八日には、本尊と仰ぐべき「大曼荼羅」を書き示されて教義を確立された。

と『日蓮の佐渡越後』には簡潔に、宗祖佐渡在島の意義を述べています。

さて、佐渡のご霊蹟を巡拝していると、大石寺による塚原跡地の記念碑や顕正会館を目にします。その度に、先師の努力によって今日まで伝えられてきたご霊蹟を未来へと伝えていくために努力しなければならないと思いました。ところで、阿仏房・千日尼ゆかりの妙宣寺（関道雄貫首）の五重塔について、『日蓮の佐渡越後』は、

聖人はその人柄を知るや「阿仏房ながら宝塔、宝塔ながら阿仏房」、阿仏房こそ生きた仏身、宝塔なのだと讃美されたほど高德で誠実な人であった。五重塔は、実はその開山を祀る堂なのである。

と紹介しています。優美な五重塔を拝し、私は『千日尼御返事』を思い浮かべました。

されば故阿仏房の聖霊は今いくにかをはすらんと人は疑ふとも、法華経の明鏡をもって其の影をうかべて候へば、靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、東むきにをはずと日蓮は見まいらせて候。（定遺一七六一頁）

こののち、「袈裟掛け松、思親の霊地」実相寺（佐渡友隆徳住職）へ参り、同住職からは代務をされている相川町蓮長寺でさまざまの話をうかがいました。そして、『観心本尊抄』執筆の際に用いられた硯水井戸のこの御井戸庵、日朗坂を経て、赦免の知らせをたずさえて佐渡に来た日朗上人着岸の旧跡、経島（きょうじま）へと足をのびしました。経島の頂上には石の祠があり、赦免状を身に帯びた日朗上人石像が祀られています。私たちはそこまでよじのぼり、石像を拝して参りました。

聖人は佐渡を立って鎌倉へ帰る様子を『光日房御書』に次のように述べられています。

文永一一年二月一四日の御赦免状、同三月八日に佐渡の国につきぬ。同十三日に国を立ちてまうら（網浦）というつ（津）にをりて、十四日はかのつにとどまり、同じき十五日に越後の寺どまり（泊）のつにつくべきか、大風にはなたれ、さいわひにふつかぢ（二日程）をすぎて、かしはざき（柏崎）につきて、次の日はこう（国府）につき、十二日をへて三月二十六日に鎌倉へ入りぬ。同じき四月八日に平左衛門尉に見参す。（略）同五月十二日に鎌倉をいでぬ。（定遺一一五五頁）

聖人のよろこびが伝わってくる文章です。

さて、この度、佐渡の靈蹟を巡拝し、おけやき、御梅堂、硯水の井戸は、ことに私の心に残りました。それは、ここに佐渡の人々の偉大な宗教者に対する尊崇の念とともに、いつまでも聖人と出会ったことを忘れずにいたいという痛切な悲嘆の思いを感じたからです。

生まれ変わり

さて、この教化研究会議二日目に講演されるカール・ベッカー先生は

現代の日本人は、臨死体験の存在を知ってはいても、死後に意識が存在することは信じていない。（『ブルー・オブ・ヘブン』〈解説〉ハヤカワ文庫 二〇一八）

と述べています。そこで当然、多くの人々は「生まれ変わり」も信じていないでしょう。では、中世の日本人はどうでしょうか。

宗祖は『兄弟鈔』では、池上兄弟について、

浄蔵・浄眼の二人の太子の生れかはりてをはするか。薬王・薬上の二人か。(定遺九二九頁)

と述べられ、『報恩抄』では、聖徳太子の前世について、

又用明天皇の御宇に聖徳太子仏法をよみはじめ、和気の妹子と申す臣下を漢土につかはして先生せんしやうの所持の一卷の法華経をとりよせ給ひて持経と定め(略)(定遺一二〇七頁)

と触れられています。

これらを併せて考えますと、『頼基陳状』に、

日蓮聖人は御経にとかれましますが如くば、久成如来の御使、上行菩薩の垂迹、法華本門の行者、後五百歳の大導師にて御座候聖人(定遺一一三三頁)

と、信徒のことばとして語られる聖人像は信徒が聖人を上行菩薩の生まれ変わり、上行再誕と仰いでいたと見てもよいと思います。

勝五郎生まれ変わり物語

一九世紀初め頃の江戸の近郊で、「勝五郎生まれ変わり」という有名な事件がありました。『あの世』と「この世」のあいだ たましいのふるさとを探して』（新潮新書 二〇一八）では、著者谷川ゆに氏は次のように述べています。

文政五年（一八二二）十一月。武蔵国多摩郡中野村（現在の八王子市東中野）に住んでいた八歳の勝五郎は、実は、自分の前世は、程久保村（現在の日野市程久保）の藤蔵とうぞうという少年で、六歳の時に疱瘡（天然痘）で死んだのだと語った。勝五郎の祖母が、程久保村のことを知っている人たちに聞いてみると、勝五郎が語った通り、確かに藤蔵の家は存在しており、当人はやはり疱瘡で亡くなっていたことが分かった。

こうして、この事件は大きく広がっていきます。

ところで、私が驚いたことは、現在、日野市郷土資料館を中心として多くの人が参加して、この歴史的事件を顕彰していることです。本年平成三一年四月一〇日、資料館の北村澄江氏の案内で私は鈴木宏彰研究員（東京都覺源院修徒）・内藤瑛鵬所員とともに、藤蔵と勝五郎の墓、両家の子孫の家を訪ね、話をうかがい、楽しいひとときを過しました。

テレビのコメンテーターとしておなじみの社会学者古市憲寿氏（一九八五年生まれ）は「生まれ変わり」について次のように語っています。

突然だが、生まれ変わりを信じている。

何もスピリチュアルに目覚めたわけでもないし、新興宗教に帰依したわけでもない。単純に生まれ変わりがあると仮定したほうが生きるのが楽だと思っっているからだ。(『誰の味方でもありません』新潮新書 二〇一九)

生まれ変わりを前提とすれば、「またお会いしましょう」と言っつて死を迎えることができるわけです。

誕生を祝福する理論

ところで、『全国布教師会連合会会報第三〇号』(二〇一八)の中で末本文美士先生は収録された講演「菩薩の倫理学」の中で、

仏教はもともと人間の苦からの救済ということを説いて、死に関する理論はあるのですが、人間が生まれることを肯定する理論というのは基本的にありません。なぜかというところ、現世というのは苦しみだから、誕生を喜ぶことはできない。だから、赤ちゃんが生まれることを祝福する理論を持っていないのです。

と述べています。ところが先生は、

偽撰とされてほとんど否定され、考慮の中に入れられなかったようなもの、それは『御講聞書』であるとか、あるいは『御義口伝』というものです。そういうものの中で展開される凡夫論、凡夫こそ根本だという、むしろ一番の根本は凡夫にあるのだという考えですね。それはもう一遍見直していてもいいんじゃないのかと。

このように問題提起され、『御義口伝』を紹介しています。

ここでは、私は『御義口伝』の中でも、「廿八品悉南無妙法蓮華經事」から引用します。それが次の一節です。

涌出とは十界の衆生の出胎の相なり。菩薩とは十界の衆生本有の慈悲なり。此の菩薩に本法の妙法蓮華經を付属せんがために従地涌出するなり。日蓮等の類ひ南無妙法蓮華經と唱え奉るものは従地涌出の菩薩なり。外に求むことなかれ。（定遺二七二二頁）

ここでは、いわば私たちの誕生が祝福され、法華經によって理論づけられています。

これに通じる表現は『無量義經』にもあり、『観心本尊抄』には、次のように引用されています。

但し初の大難を遮せば、無量義經に云く、譬ば国王と夫人と新に王子を生ぜん。（略）諸仏の国王と是の經の夫人と和合して共にこの菩薩の子を生ず。（略）慈愛偏に覆われん。（定遺七一〇頁）

この譬えにはたいへんセクシヤルな表現が使用されています。とはいえ、聖人は人の誕生をそのまま肯定されてはいないようです。現代でも人間の「性」をめぐることは、米国や韓国で「#METOO」や「キム・ジョン問題」すなわち性暴力、性犯罪、性差別として、おおきな社会問題となっていることを忘れてはなりません。性が男女どちらの視点で描かれているのかに、私たちは注意を払いたいものです。『始聞仏乘義』や『重須殿女房御返事』には次のように述べられています。

我等其根本を尋ね究れば、父母の精血赤白二滯和合して一身と為る。悪の根本不浄の源也。(定遺一四五三頁)

我等は父母の精血変じて人となり候へば三毒の根本姪欲の源也。(定遺一八五六頁)

ところがそれぞれ、続いて、

三毒を変じて三徳と為すのみ(略)即身成仏と申すは是也。(定遺一四五三頁)

いかでか仏はわたらせ給ふべきと疑ひ候へども、又うちかへしく案じ候へば、其ゆわれもやとをばへ候。蓮きよきもの、泥よりいでたり。せんだんはかうばしき物、大地よりをいたり。(定遺一八五六頁)

この、仏は「泥よりいでたり」とか「大地よりをいたり」という表現は、菩薩が「地より涌出す」と共通しているのではないでしょうか。

また、『法華取要抄』には

(頁) 此土の我等衆生は五百塵点劫より己来教主釈尊の愛子なり。不孝の失によつて今に覚知せず(略)(定遺八一二)

と示されています。

なかなか複雑です。しかし、末木先生の指摘する「一番の根本は凡夫にある」という考えが全くないともいえません。「蓮はきよきもの、泥よりいでたり。（略）大地よりをいたり」と示されているのですから。私たちの誕生や自覚、そして再生、さらに皆さま方の家庭生活の意味を「従地涌出」のことばから考えてみましょう。

天空のお寺を訪ねて

七月四日、五日に、山梨県早川町の寺院調査へ行きました。日本でもっとも過疎と高齢化が進行している場所の一つです。

代務住職の山本是温師、清水本漸師に案内されてお寺を訪ねましたが、お寺によっては海拔五〇〇メートル、あるいは八〇〇メートルに建立されています。

堂内のご本尊と荘嚴は檀信徒の浄財によって見事に整えられ、心をこめて描かれた御一代記がかけられ、行事はきちんと行われていました。そして視線を堂外に移すと南アルプスに連なる山々が屏風のようにそびえ、雲が渦まいていました。その光景に私は圧倒され、私自身が「地より涌出す」との感慨にひたりました。私は、この地域に生きる人々の信仰の力によって、再生し、生まれ変わるといふ体験をしたのです。

苦難を経ることによって、佐渡において聖人は「出胎」＝胎を出づる、すなわち、菩薩として生まれ変わるといふ自覚を得られたのではないのでしょうか。

とはいえ、人生に苦しむ多くの人々がいます。たとえば自殺未遂の体験がある人は次のように語っています。

就活で失敗した短大生活、友達がいなくて自殺を考えていた高校時代、小中学校ではいじめに遭っていたことを

思うと、もう、母の胎内に戻るしかなさそうだ。私は一人で窓の外を見ながら自嘲気味に口角を上げた。生まれてきてよかったと言える人は世界中にどれくらいいるのだろう。『わたしはなにも悪くない』小林エリコ 晶文社
二〇一九)

降誕八〇〇年を目前にして、私どもも地涌の菩薩として生まれ変わり、私たち自身の肉体的な誕生も菩薩の誕生として祝福し、父母に感謝しうる自分になりたいと、私は思っています。

これから、鈴木先生、中尾先生、そして明日のカール・ベツカー先生の基調講演をうけて、分散会において、豊かな話し合いを繰り広げていただきたいと思います。そして、「二〇二〇年、池上駅が生まれ変わります。」というポスターのように、私たちも生まれ変わります。その上で、ある意味で悲惨な人生を魅力のあるすばらしい人生へと転じていきたいものです。これこそ「いのちに合掌」ではありませんか。分散会の最後に宗門運動の成果について語り合うことをお願いして、私の基調報告を終わります。